

編集室

* 「光陰矢の如し」とはいうが、時がたつのは早いもので、編集特別幹事の仕事をやるようになってから、早一年近くが経過しようとしている。以前に編集委員をやっていたとはいえ、編集特別幹事の仕事を初めてのことが多く、当初は不安で一杯のスタートであったことが思い出される。最近では、幾分慣れてきたのか、それなりに編集特別幹事の業務も無難にこなすようになり、特集記事も企画できるようになった。これも一重に事務局や他の委員の皆様の助けがあつたものである。まずは、ここに紙面を借りて感謝の意を表したい。

* 学会の編集委員というと、ボランティアベースの業務で、余り好まれる種類のものでないのが通常である。実は、私もこの仕事を引き受けるときは、自ら進んでという感じでなく、今まで学会で活動させて頂いた恩返的な意味合いで引き受けたものであった。ところが、あに図らんや、実際にやってみるとこれがなかなか刺激的なのである。確かに、今までよりは忙しくなったが、一概に本来業務と関係ないことばかりとはいえないことに気が付いたのである。

* まず、刺激を受けるのは、他の委員の皆さんとの出会いである。いろいろなバックグラウンドを持った方と、会誌記事の選定を巡る議論で今までと違った考え方を知ることができる。出会いという意味では、著者の方との出会いも含まれるであろう。幸いにして、世間的に本学会の学術雑誌としての権威を認めて頂いているからであろうか、それぞれの分野の一流の研究者や技術者の方にいきなりメールなどで連絡しても、ほとんどの場合すぐに対応して頂いている。会誌記事を通じてその方たちの知識を共有できるということも大きな刺激となっている。

* 会誌記事を策定する際に知り得る記事の内容についても自分の専門分野とは異なる分野を扱うことが多く、いろいろな新しい発見をすることがあり、こちらも大いに刺激を感じている。正直なところ、編集委員会での作業を通じて初めて知った技術分野も多く、情報収集という面では個人的にも楽しみにしている側面がある。

* 新しい情報といえば、例えば、以下に述べることがそれに当たるであろう。

* 読者の皆さんは「情報爆発」という言葉を聞いたことがある、と思う。ありとあらゆる情報がまさしく爆発的に世の中にあふれかえることを意味し、そのような状況ではいかに有効な情報を効率良く利用するかの仕組みが重要となり、そのための解決策がいろいろな所で検討されてきた。本学会誌でも既に何度となく「情報爆発」に関係する記事を掲載してきたことと思う。そして、物事の流れとしては至極当然なのだが、その「情報爆発」によって蓄積された情報が物理空間上の実世界と密接に影響し合う次の段階に進もうとしている。そのようなサイバー情報と実世界を有機的につなぐシステムをサイバーフィジカルシステムズという。サイバーフィジカルシステムズという言葉はまだ新しくそれほど一般化していないが、今後、そのコンセプトに基づいた技術研究の発展は加速されることが予想される。既に文部科学省では、今後の科学研究の最重要課題の一つにサイバーフィジカルシステムズを挙げており、恐らく、今後、この言葉を見聞きする機会が多くなるであろう。少しこの場を借りて会誌記事の宣伝をしておく、平成 23 年 8 月号では、サイバーフィジカルシステムズを扱った小特集記事を企画している。研究の第一線で活躍する情報分野の研究者の皆様にもいろいろな側面でのサイバーフィジカルシステムズについて紹介して頂いているので、ぜひ期待してもらいたい。また、今月号の小特集記事もセンサのデータマイニングを扱っており、これも一種のサイバーフィジカルシステムズといっても差し支えないと思う。今後も情報をより明示的に実世界空間で活用するといった技術がどんどん目の目を見ることになると思われる。

* 今後は、サイバーフィジカルシステムズに限らず、斬新な技術トピックがどんどん出現してくると思うので、機会を捉えてタイムリーな会誌記事として読者の皆さんに提供していきたいと考えている。また、余りにも専門的すぎると読むのがつらくなるので、時にはほっと息を抜けるような面白い記事を掲載していくことも必要だろうと思う。今後もこのように紙面全体のバランスを考えた魅力ある会誌作りを目指していく所存なので、折に触れて叱咤激励のほどよろしくお願ひする次第である。

(編集特別幹事 苗村昌秀)